
シーソーゲーム

朱璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーソーゲーム

【Nコード】

N2212Z

【作者名】

朱璃

【あらすじ】

天使のような顔に似合わず、喧嘩が強く口汚いミカゲ。そんなミカゲに虐げられながらも、自称親友を貫くタカマ。話していてもいつも最後はミカゲに突き落とされる。上がったりがったり、そんな会話のシーソーゲーム。ほぼ会話文のみで構成されています。あまりに短い話の集まりなので、大体5話一まとめでアップしていきます。

登場人物（前書き）

登場人物は増えるたびに随時追加していきます。

登場人物

ミカゲ

* 本名、早乙女魅影。さおとめみかげ 高校2年。

* 容姿端麗、頭脳明晰、しかも家が金持ち。しかし、驚くほど口汚い毒舌王。天使の顔で悪魔のような男。

* シスコン。

* 好き嫌いが激しい。

* 顔に似合わず喧嘩がめちゃくちや強い。

タカマ

* 本名、神楽坂鷹真。かぐらざかたかま 高校2年。

* イケメンと呼ばれる部類には入るが、本人は気付いていない。

* 顔が濃いのを気にしている。

* 自称ミカゲの親友。ミカゲに虐げられながらも一緒にいる。

* 苦勞人。

ナナセ

* 本名、早乙女七瀬。高校1年。

* ミカゲの妹。

* ミカゲによく似た美少女。しかし性格は似ず、誰にでも別け隔てなく優しい。が、時々黒い。常にふわふわとした笑顔で周りを和ませるが、案外策士。

* 先制パンチ

「ミカゲ、俺らって親友だよな」

「なぜそうなった」

「ええっ!?!」

「お前が親友ならゴキブリですら親友と呼べるね」

「ぐほあっ! 右ストレート!」

「やだな、そんなことするわけないじゃない」

「ミ、ミカゲ……」

「だって僕は左利きだよ? 力が入らないでしょ」

「悪魔!」

* 屁理屈ならば負けません

「僕さ、黒い飲み物が嫌いなんだよね」

「はあ？」

「ブラックコーヒーとか、コーラとか。もうあれ最悪」

「いや、たまたま黒かったただけだろ」

「そんなことないよ」

「ココアは飲むじゃん」

「……馬鹿？」

「何故っ!？」

「ココアは茶色でしょ」

屁理屈大王、健在でした。

* 出会い

「そついえば出会ったばつかの頃って、結構青春したよな」

「何その暑苦しい単語。気持ち悪い」

「いやいや、だって毎日一緒に上級生とか他校生相手に喧嘩してたじゃん」

「お前が勝手に付き纏ってきたんじゃないか」

「言つとくけど、あれはお前の客のが多かったんだからね！？加勢してやったんじゃない！」

「押し付けがましいな。あんまり鬱陶おつとつしいこと言つと、その無駄に凹凸おつとつのついた顔、また平面にしてあげようか」

「それって腫れて平面になるってことですよね。やめて！お前のパンチ破壊力凄過ぎるから！」

「得物は何がいい？選ばせてあげるよ」

「武器！？武器使うの！？死刑宣告！？」

「やだな、人聞き悪い。で、日本刀と拳銃、どっちがいい？」

「やっぱり殺る気満々じゃん！てゆーか銃刀法にがつり引っ掛かってるからね！？」

「些細なことだよ」

「非国民め……」

*ソラミミ

「人って聞いたことがない単語や聞き慣れない単語があると、自分の知ってる言葉に置き換えて認識するんだってさ」

「へえ」

「ところで昨日、深夜番組でAVやってたの知ってる？」

「はあ！？公共の電波でそんなワケ……」

「そつえばさ、×××の×××が×××その性質を×××用いた×××」

「え、ちょ、何！？どんな性質！？何を用いたの！？卑猥！」

「……はあ？」

「え？」

「僕はハドロン物理学について説明してただけだよ。何て聞こえたの？」

「ハド……?」

「変態」

「ちょっと待てええ!さっきのAVの前振りはなんだったんだよ!」

「先入観ってコワイよね」

「おま、ハメたなあああ!?!」

*妹よ

「お前、妹いたんだな」

「……なぜそれを知っている」

「ちょ、頭を掴むのやめてください!頭蓋骨粉碎する気か!?!力、力入り過ぎだから!」

ぎりぎりぎりぎり。

「答える!答えるから!」

「で？」

「昨日たまたま見かけたんだよ！一緒に買い物してただろ。そっくりだったし、妹かなって。似てるはずなのに全然違ってたな。可愛かったなあ……な、紹介してく……何やってんの！？」

「ん？この世に不要な物体を処分してやろうかと」

「机は持ち上げる物ではありません！」

「分かってる。殴るための物だよな？」

「ぜ、全然分かってねえ！」

* 出会っちゃった

「……………」

「何してんだよ。お前が来たと言って言っただろ。馬鹿みたいに口開けてないで、さつさと歩いてよ」

「いや、てゆうか……金持ちつてのは知ってたけどこれは……」

「さつさと入って！ ナナセが帰ってきちゃうでしょ。ナナセが帰ってくる前に去れ」

「ケチ」

「家に連れてきてやつただけでも最大限の譲歩だよ。感謝してよね」

「お兄ちゃん？」

「！」

「お家の前で何してるの？ あ、お友達？」

ぶおんっ！

「いってえ！」

小柄な体型をものともせず、ミカゲは俺をぶん投げた。

「気のせいだよ、ナナセ。何かいた？僕には見えなかったけど」

「そう？」

そう？って妹さん！天然ですか！？

「ちょっと待て！俺ら親友だろ、ミカゲ！」

おいこら、舌打ちをするな。

妹さんは俺とミカゲを交互に見ると、くいつと首を傾げた。やべ、くそ可愛い。あ、やだ、ミカゲ様が拳握り締めてる。

「仲良しなんですねぇ」

今までのやり取り見てました！？

やっぱり妹さんは天然らしい。

*箱庭

なんだかんだと、結局タカマはナナセと知り合った。こんな時ばかり運のいい男だ。」

「せっかく女子校に入れたのに。お前のせいで台無し」

「妹の出会いを潰してたのか……」

「出会い？僕が潰したのは、妹に近付く輩の人生だけだよ」

「そっちの方が酷いわっ！」

俺も潰されるのか……とぶつぶつ呟いているタカマをスルーする。

「妹がいることぐらい教えてくれたっていいだろ！親友なのに！」

だって……ねえ？

大切な妹と親友（仮）がくつついちゃったら、僕が入る隙が無くなっちゃうじゃない。

「もう知ったからいいでしょ。はい、この話は終わり」

「ほんつとひでえ！」

薄情者！と喚くタカマは無視。

妹との時間、タカマとの時間。どっちも失いたくない。不本意だけれど、心地いい。

今はまだ、この狭い世界にいたいんだ。

*お前が言えって言ったのに

「うちの妹は確かに可愛いけど。具体的にどこが好きなのか、愛を語ってみてよ。じゃないと片思いすら認めない」

「片思いすら認めてくれないのか……。あ、愛か。そうだな、可愛くて優しく、あのふわっとした笑顔がなんとも言えないよな。たまに見せる恥じらった表情とかもう、辛抱たまらんって言うか」

「タカマ……」

「な、なんだよ」

「変態だね」

「んなつ！」

「あ、言い忘れてたけどさ」

「？」

「僕、愛を語る男は嫌いなんだよね」

「！！」

お前が言えって言ったんだろーが！

*最低条件

「てゆーかさ、もしナナセちゃんが行き遅れたらどうすんだよ？お前のせいだぞ」

「いんじゃない？僕が養っていくよ。子供は養子を貰えばいいし、父の会社を継ぐからお金は苦労させないし」

「嫁にやろつという意志は微塵も無いのか！？」

「無いね。少なくともナナセをやってもいいと納得させる奴は、今までの人生ではいなかった」

「じゃあ、どういう奴ならいいんだよ？」

「僕より頭が良くて顔が良くて喧嘩が強くて」

「すでにそこでハードル高いですね。てゆーかまだあるのか」

「僕の言うことには絶対服従。反抗心という言葉が欠片も無く、僕

が黒と言っ たら白も黒になる…… そんな奴じゃないと許せないね」

「…………… それって奴隷ですよー」

* 結論

「ま、つまり僕より似合う男はいないってことだね」

「うわ、無理矢理まとめやがった」

「まとめ『やがった』？」

「ひいっ！ごめんなさいお兄様！」

「…………… お兄様？」

結局死亡フラグでした。

*今さらですが

「部活に入ろうと思うんだ」

「……何、急に。そういうキャラじゃないだろ。部活に燃えてる姿とか想像つかないんですけど」

「いや、ぼちぼちこの辺で内申点でも稼いでおこうかと」

「今さら！？もう高2の夏なんですけど！大体お前、親父さんの跡継ぐなら内申点稼ぐ必要ないだろ」

「大人には色々あるんだよ」

「……部活って子供の特権だよな」

*はい、やすい、うまい？

「華道部なんてどうかな」

「いやどうかなって言われても……似合うといえば（見た目だけは）似合うけど、なんでそのセレクト？」

「活動時間が短そうで、とりあえずやってるって言えばなんとなく上品に思われそうな響きだから。（終わるのが）早い、簡単（そう）、（一見）綺麗だよな」

「そんなどっかのキャッチコピーみたいなこと言われても……てゆーかやっぱやる気ないんじゃない？」

「部活なんかで残りの人生を無駄にしたくないんだよ」

「お前いくつよ……」

*当然あなたはオプションです

「というか、そもそもタカマは何部がいいのさ」

「は！？なんで俺の希望を聞く！？」

「だってお前も入るわけだし」

「何その自信！俺が入ると信じて疑わない雰囲気は一体！？という

か確定！？」

「……嫌なの？」

ぼきつぼきつ。

「喜んで」

だからどうか指を鳴らしながら笑顔で近付いてこないでください。

*中止

「やっぱり部活に入るのはやめた」

「まあ賢明だな。で、理由は」

「部活には部長というものが存在する」

「まーそうだな」

「僕に人の下で働けと？」

「別に部活は労働じゃないんだけど……」

「あれこれ指示されたら部長とやらはもう学校に来れなくなるかもね。ううん、社会的に抹消してもいいんだけど」

「何する気!？」

「だから部活はやめておいたんだよ。僕は優しいからね」

……単にめんどくさくなっただけだ。

*単に肩書きが気に食わなかっただけ

「てゆうかさ、クラスにだって委員長はいるじゃん。なんで部長は駄目で、委員長はいいわけ」

「会社にクラス委員長なんて役職がある？」

「いや、無いけど……」

「じゃあそれで」

……じゃあってなんでしょう。

*寝てる方が悪い

テスト終了の合図が鳴らされる。

「あーもうさ、xとかyとかどーでもよくね？数学って白黒はつきりつけるためのもんだろ。そんな曖昧な数字叩き出すなんての」

「自分の頭の悪さを認めたくないんだね。僕は頭がいいからそんな気持ち分らないけど」

「もうやだ……いつもナナセちゃんと遊びほろけてるくせに、なんでお前頭いいの……。俺は絶対赤点だよ……」

「勉強は要領さえ掴めれば簡単だよ。それにお前、赤点の心配してる場合じゃないんじゃない」

「？」

「涎^{ヨダレ}で答案、消えてないといいね」

「回収係ー！カムバークー！」

*早く来い来い

「夏休み……夏休みが来る！」

「うるさいな。予告してくれなくても知ってるよ」

「だってお前、夏休みだぞ！？夏休みと言ったら、学校というしがらみから解放される奇蹟の1ヶ月じゃねえか！」

「タカマには1ヶ月も無いと思うよ」

「エ」

「補習、頑張つてね」

「ちょ、確定デスカー！？」

*カウントダウン

「ふっふっふ……」

「気色悪い、気持ち悪い、気味が悪い」

「ちょ、何その三段活用」

「今年最大級に、死ねばいいのと思った」

「ちょっと笑った程度で!？」

「で、なんで笑ってたの。聞いてほしかったんでしょ?くだらないことだったらそのザルな頭をかち割られて、夏休みを丸々ベッドの上で過ごすことになるよ」

「俺の話は軽くスルー!?!しかも超怖いこと言ってる!」

「さつさと言わないとカウントダウン始めるよ。ごーよんさんにい

「ちょ、速い!速いから!」

*シロクロ

「なんと赤点無かったんだよ!」

「ギリギリ免れた、ということか」

「ま、まあな。でもこれで心置きなく一緒に遊べるな!」

「はあ？なんで夏休みにまでお前の顔見なきゃいけないんだよ」

「ぎゃふん！なんでだよ！海とか行こうぜ！」

「人が多いのも暑いのも嫌だ」

「お前は寒いのも嫌いだろう……。大体お前白過ぎるよ。不健康そう。少し焼ける」

「お前みたいに無駄に焦げてるよりマシだよ」

「……自黒ですみません」

*喧嘩納め

「終わったー！明日から夏休みー！！よし、今日は遊んで帰ろうぜ、ミカゲ」

「無理」

「なんで！いつものことながら付き合いわりいな！」

「何も先に帰ると言ってるわけじゃない。僕に付き合え」

「え、なにに？お前から誘うなんて珍しい」

「学期納め、ってやつかな」

「はい？」

10分後。

「お前これただの呼び出しじゃねーか！」

「身の程知らずが何故か大量に湧いて出たんだよ。一人で労力使うのも疲れるじゃない」

「無視すりゃいいだろ！」

「やだな。逆らおうという意思のある奴は、今のうちに矯正しておかないと」

「この人学校を乗っ取ろうとしてる！！」

5（前書き）

若干ですか下ネタ注意。最初だけシリアス気味です。

*グッバイ、マザー

ちよつとそこまで、なんて綺麗な笑顔であの人は消えた。あれは僕達から解放されることから浮かんだ表情だったのだろうか。

「どこ行くの」

「あゝ、ちよつとそこまで」

「……」

「ちよ、な、何！？なんで殴る！？」

「ちゃんと言ってけ」

「トイレだよトイレ。なんだよいきなり」

「曖昧なの嫌いなんだ」

「そついやお前そついうのめんどくさがりそうなのに、律儀に答えるよな」

「ちよつとそこまでなんて、何かを誤魔化したい人の低俗な台詞だよ」

「……うん、まあ相手に対して誠実じゃないよな。ごめん」

「……ばか」

「んなつ！謝ったのにー！！」

ああ、なんてどこまでも素直に言葉を受け止めてくれるんだろう。

さよなら、母さん。

僕はもう、貴女の影を探さない。

*父

「やあ！君が噂のタカマ君？いらっしやい」

「お邪魔してます。えーっと、お兄さんですか？」

「馬鹿なこと言わないで。家の召使いだよ」

「ええ！？ちょっとミカゲ君！？パパ泣いちゃうよ！？」

「え、お父さん！？わ、若いですね……どう見ても20代にしか」

「若作りもいいとこだよ。もう立派な年齢詐称だね。捕まればいいのに」

「しくしくしく」

うわぁ……なんかこーゆうやり取りすーげえデジャヴ。

*家庭内事情

「いや、でもやっぱりお父さんかっこいいですね。ミカゲとナナセちやんとはあんまり似てないけど。母親似？」

しーん。

「え……………」

「エロイムエッサイムエロイムエッサイム悪霊退散我を守りたまえ」

「え、ちょ、ミカゲさん！？」

「タカマ君……………」

「は、はい」

「妻は随分前に、家を出ていったんだ」

「え。す、すみません俺」

「いやいいんだよ……うつろう……」

「お……お父さん……？」

「やっぱり俺が情けないからかなああああ！……どう思うっつうっつうっ！？」

「エエエエエ！？」

*男心クラッシャー

「ただいま……って、何この雰囲気どうしたの？」

「あ、おかえりナナセちゃん……」

「いらっしやいませタカマさん。……なんで3人でテーブル囲んで黙々とジュース飲んでるんですか？なんだかお兄ちゃんとお父さんはぶつぶつ言ってるし」

「いや……なんというか……申し訳ない」

「ああ、もしかしてお母さんのことですか？」

「あー、うん。ほんとごめん」

「いいんですよタカマさん。もう何年も経ってるのにこうなんだから。まったく情けないです」

「いやでもほら、デリケートな問題だしね」

「でもその話題が出る度にこうだと……ほんとに金タ。ついてるのかしら」

「……………ん？」

空耳？

「どうかしました？」

うふふと笑うナナセちゃんはいつも通りに見える。

おかしいな、なんだか彼女の台詞とは思えない言葉が聞こえたよ
うな。気のせいだな、うん。

「ほら、お兄ちゃんお父さん。お客様放って何してるの。特にお父さん。お母さんに逃げられてからもう長いんだから、そろそろ再婚しないと。そんな状態だと再婚する前に『不能』になっちゃうよ？」

気のせい！気のせいだ！俺には何も聞こえない！！

「ほら、早く立って！……………握り潰すよ？」

何をデスカー……！！？！！？

*確認なんてできません

「ナ、ナナセちゃん……………？」

「どうかしました？」

にこにこ。

「えーっとそのお……………」

「はい」

にこにこにこ。

「あの……………ね」

「なんでしょう」

にににににににに。

「……なんでもないです」

聞けない!!

*夏真つ盛り！

「うーみーはーひろいーなーおおきーいーなー」

「五月蠅い黙れ消え失せろ」

「ひどっ！せっかく海に来たんだから泳ごうぜー」

「お前一人で逝ってこい」

「今『いく』の漢字が違いますでしたか……」

「そう？暑くて被害妄想が膨らんでるんじゃないのか？それは重症だ。よし、帰ろう」

「まだ来て5分だよ!？」

「数えてたのか。暇人だな」

「なんとなくだよなんとなく！とにかく海に入ろう!」

「嫌だ」

「なーんーでー」

「濡れるのが嫌いだから」

「風呂に入っても濡れるじゃん」

「風呂は綺麗になるもの、海は汚れるもの」

「最後にシャワー浴びればいいじゃん！」

「お前は本当に喧しいな。そんなに塩水に入りたければ、うちのプールに塩をぶちこんでから貸してやる」

「なんか違う！そんな人工物は嫌だ！」

「僕を巻き込むな！」

「夏の醍醐味を感じたいんだよおおおおお」

「……………つぎっ」

* 海の家

「お前なんも食わねえの？」

「砂の混じった物を口にする気はない」

「やだなー、それが海の家醍醐味じゃん。おっちゃん、焼きそば2つ！ほら、奢りだ。食べ！」

「醍醐味ねえ……。それもそうか」

「お、珍しく素直じゃん」

「ここからここまで……。というかこの店のメニューにあるもの全て一品ずつお願い」

「ちょ、豪快すぎねえ？お前そんなに食えんの？」

「大丈夫、食べるのタカマだから。僕の奢りだよ。全部残さず食べ。残したら……。分かってるよね？」

「ワア、いい笑顔！」

*視えてます

「人はなぜ無駄な行為をしたがるんだろう……」

「え、もしかして海水浴のことを言ってます？」

「それ以外に何か？」

「んー……この無駄な行為を楽しみに生きてるわけよ。ま、楽しみは人それぞれだと思うけど」

「それが海だつてというのが理解できないんだ」

「え、なんで？」

「だつて、たくさん『いる』じゃないか」

「そりゃ夏だし人はいっぱいいるだろうよ」

「人以外のものが」

「！？え、ねえ、ちょ、それって、それってさあー！！」

*新境地

「なあタカマー。お前ってよく早乙女と一緒にいるけどさ、あいつとどんな話すんの。なんか話し辛そう」

「主に存在を全否定される会話」

「……へえ」

「でもこう、テンポが良くてさ。打てば響く、みたいな」

「……ふうん」

「だんだん楽しく……ってゆーか気持ち良く……」

「……罵られる原因がお前にもあることがよく分かった」

*手の平を返す

「なあ、遊園地行こうぜ」

「海の次は遊園地？ほんとくだらない。遊園地なんてただの子供騙しじゃない」

「夢と希望がたくさん詰まってるだろ」

「そんな目に見えないものは信じないし。大体、ちよつとスピードが速い乗り物に乗って何が楽しいんだ。そんなに速い乗り物に乗りたいたなら、早乙女家の総力をあげてロケットで打ち上げてあげるよ。それともコンコルドを貸してあげようか？パイロットは貸さないけど」

コンコルド…マッハで飛行する超音速旅客機。

「持ってるんですか！？てゆうーかあの親父さんならお前のワガママ本気で叶えちゃいそうで怖い……」

「だから、遊園地に行く必要はない。以上」

「スピード感とはまた違った楽しみがあるんだって！行こうってー」

「必要性を感じない。くだらない乗り物に乗るために並ぶ時間ももつたいない」

「並んでる雰囲気すら楽しいんだって！」

「低俗」

「ミカゲさーん……行こうよ」

「しつこ……」

「お兄ちゃーん。あ、タカマさんこんにちは」

「ナナセ。そんなのに挨拶なくていいから」

「ひ、ひでえ……一応客なのに」

「毎日人の家で涼んで冷たい飲み物を摂取し、あまつさえ食事までしていく奴を客とは言わない。で、ナナセ。どうしたの？」

「あのね、新しい遊園地がオープンしたんだって！行きたいなあ…
…ダメ？」

「行く。僕もちょうど行きたかったんだ。楽しみだね」

「あっさり意見を覆しやがった……」

*水族館

「お前遊園地はあんなに嫌がってたくせに、水族館は好きだったんだな」

「まあね。だってはつきりしてて分かりやすいじゃない」

「何が？」

「弱肉強食。食物連鎖」

「ひいつ！」

その綺麗な笑顔が怖いです。

*生態系

「いやいやいや。よく考えたら、捕食関係にある奴らを同じ水槽に入れてないじゃん」

「はあ？当たり前でしょ」

「エ。じゃあ何が弱肉強食……」

「人間がトップだってこと」

「歪んでるわ〜！」

*野生の王国

「でもさあ、人間なんて自然界に放されたらあっさりご臨終なんじゃね？現代人には生き残れねえ」

「なんのために頭があるの？少しは考えなよ。だからお前はいつまで経っても三流なんだよ」

「え！？ちょ、何が？何に置いて！？三流って、どのカテゴリーで！？」

「人間」

人間界ですら生き残れねえ！！

*意外な

「……………」

「？何見てんの？」

「ナナセのお土産」

「ナナセちゃん今日は部活で来れないって言ってたもんな。何買うんだ？」

「これなんてどうかな」

「…………何そのUMA」

「可愛いじゃないか。大体生きてないんだから、未確認生物とは言わないだろう」

「いや…………それにしたって…………ナナセちゃん喜ぶか？」

「…………おかしいな。ナナセの部屋にはこういうぬいぐるみがたくさんあるんだけど」

…………自分の顔が綺麗なだけに、美的感覚が狂ったんだな、きっと。

「あとは蜘蛛の標本とかも置いてあったし……絨毯じゅうたんの模様は謎の魔
方陣だし……」

「黒魔術!？」

* 視えます喚びます

「つかぬ事をお聞きますが、ナナセちゃんの部活って何？」

「超上現象研究部。略してオカルト部」

全然略されてませんが。

「……それは主にどのような活動をする部活で」

「科学では証明できないことを研究したり、実際に噂のある場所に行ったり、UFOを喚び寄せてみたり、『何か』を召喚してみたり」

「最後の2つは成功したことがあるんですか!？」

「稀に」

「非科学的!何この兄妹もう嫌!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2212z/>

シーソーゲーム

2011年12月21日20時50分発行